

- | | | | | | |
|-------|---|---------|-------|-------------------------------------|------|
| 3.109 | 高炉セメントコンクリートの研究,
コンクリート・ライブラリー第25号,
丸安隆和 他 | 70年版 | 3.128 | ソ連, ガラス化工便覧, 日ソ通,
(日本語訳) | 72年版 |
| 3.110 | 高張力異形鉄筋の使用に関する基礎
研究, コンクリート・ライブラリー
第27号, 岡村 甫 | 70年版 | 3.129 | ソ連, 工業用炉設計便覧, 日ソ通,
(日本語訳) | 75年版 |
| 3.111 | JEMIS, 日本電気計測工業会 | 78年版 | 3.130 | ソ連, 金属の脱酸, 日ソ通,
(日本語訳) | 75年版 |
| 3.112 | 鋳造品のエンジニアリングデータ
ブック, I~IV, 総合鋳物センター | 80~81年版 | 3.131 | ソ連, 耐寒鋼, 日ソ通, (日本語訳) | 70年版 |
| 3.113 | H形鋼デザインマニュアル,
鋼構造協会 | 74~79年版 | 3.132 | ソ連, 鋼の耐寒性, 日ソ通,
(日本語訳) | 69年版 |
| 3.114 | 金属合金の強度, 金属工学シリーズ4,
日本金属学会 | 72年版 | 3.133 | ソ連, 低温用材料と冷脆性, 日ソ通,
(日本語訳) | 73年版 |
| 3.115 | 金属材料強度試験便覧, 日本材料学会 | 77年版 | 3.134 | ソ連, サーメット材料とその製品,
日ソ通, (日本語訳) | 67年版 |
| 3.116 | アルミニウム表面技術便覧,
軽金属出版 | 80年版 | 3.135 | ソ連, シタルの生産技術, 日ソ通,
(日本語訳) | 70年版 |
| 3.117 | 分析科学データブック,
日本分析化学会 | 80年版 | 3.136 | ソ連, 鉄冶金滓の利用, 日ソ通,
(日本語訳) | 69年版 |
| 3.118 | セラミックデータベース,
工業製品技術協会 | 76年版 | 3.137 | ソ連, 冶金滓による耐熱コンクリ
ート, 日ソ通, (日本語訳) | 72年版 |
| 3.119 | Schlackenatlas (Slag Atlas),
(独・英文併記) VDEh | 81年版 | 3.138 | ソ連, 金属ハンドブック, 日ソ通,
(日本語訳) | 70年版 |
| 3.120 | 水処理薬品ハンドブック 栗田工業 | 82年版 | 3.139 | ソ連, 規格, 金属の試験法, 日ソ通,
(日本語訳) | 75年版 |
| 3.121 | 分析化学データブック
日本分析化学会 | 82年版 | 3.140 | ソ連, 超高融点材料便覧, 日ソ通,
(日本語訳) | 77年版 |
| 3.122 | 建設手帳 住金 | 81年版 | 3.141 | ソ連, 耐火物製品と材料及び原料,
日ソ通, (日本語訳) | 77年版 |
| 3.123 | JIS 圧力容器 日本規格協会 | 81年版 | 3.142 | ソ連, 新しい合金めっき法, 日ソ通,
(日本語訳) | 80年版 |
| 3.124 | SI 単位活用事典 〃 | 79年版 | 3.143 | ソ連, めっき技術ハンドブック,
日ソ通, (日本語訳) | 83年版 |
| 3.125 | JIS 計量単位換算表 〃 | 81年版 | | | |
| 3.126 | カタログ類 川鉄, 新日鉄他 | | | | |
| 3.127 | 原子力発電所耐震設計指針
日本電気協会 | 70年版 | | | |

編集後記

「鉄と鋼」はすべての鉄鋼製造技術者・研究者の研さんと交流の場として等しく利用されるべきことは言うまでもないが、掲載記事の内容には偏りがあると思われる。すなわち製鉄・製鋼・材料関連のいわゆる専攻科目で言えば冶金・金属材料の論文の比率が高くなっている。現在編集委員会の中で抄録欄の取扱いについて検討が行われているが、この欄をどのように利用し、今後どのようにすべきかを鉄鋼メーカー研究所員120人ほどにアンケート調査したところ、専門分野によつて著しく異なつたニュアンスの回答が得られた。鉄・鋼・材料分野の研究者は約60%の人々が抄録欄を積極的に利用しているのに対し、加工・分析分野の研究者は1/2の約30%であつた。また今後抄録欄の継続を望むものは前者で80~90%、後者で60%程度であつた。とくに機械・電気・計測系研究者の満足度が低いことが目立つた。現場技術者まで含めると機・

電・計の会員数の比率はもつと高くなるはずであるから、これは軽視できない問題と言える。抄録欄の内容傾向と本体のそれとは一致しないまでも無関係ではあるまい。最近の講演大会をみると機・電・計関係の発表も多く、また協会活動の一環として圧延や設備関連の部会・分科会も盛んに行われているのであるから「鉄と鋼」誌の内容ももつと「技術分野の公平化」が行われても良いと思われる。「公平化」を実現するのは会員諸兄の投稿が最大の原動力になることをよく認識して頂きたい。自身の専門分野と「鉄と鋼」の内容に何となく違和感をもつておられる方、また鉄鋼の新しい技術分野に携わり、その存在意義を大いに喧伝すべきと感じておられる方、そのような方々にまず投稿によつて行動を起こして頂き、鉄鋼製造技術の全分野のアクティビティを正しく反映した「鉄と鋼」になつて欲しいと念じている。(T. S.)